

# 古代・中世日本の住居と寝衣具について

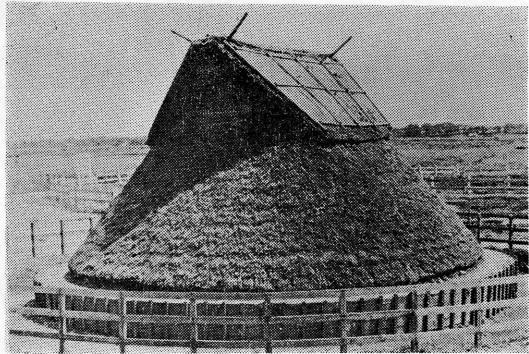
奥平志づ江

## 1 序 論

生活環境、様式または生態の違いにかかわらず動物、特に高等動物はその生涯の大半を休息と睡眠のため、その巣で暮していると考えられる。例を人間にとり、その生涯を60年とすれば休息と睡眠にそれぞれ約20年づつを費していることになろう。外敵と厳しい自然環境から身を守りながら、独り又は家族、仲間と休息安眠をとる場所が住居であり、それを補って直接身にまとい又は被るものが寝衣具であることを思えば、この両者の発展経緯について調べて見ることは無意味ではないと考え、縄文、弥生、古墳文化時代より飛鳥時代中期に至る所謂日本古代と奈良、平安時代の中世に亘る住居と寝衣具について、調査結果の一端を紹介する。

## 2 古代の住居と寝衣具

日本においてその跡が見られる最古の住居は縄文時代早期の堅穴住居で、方形平面と円形平面の二つの形態があり、炉穴を屋外に掘った簡単なもので、単に休息、睡眠のための覆に過ぎなかつたものである。縄文時代の前期になつてその中央に炉が設けられ、始めて炊事が屋内で行なわれるようになったが、その後、弥生文化時代に至るまで、その形態、内容は殆んど変らなかつたと思われる。この堅穴住居は地面を50cmほど掘り下げ、掘り出した土を周囲に盛り上げて、その上に草葺の屋根を被せ、盛土から上には壁も窓もない形態のもので、単に上部には採光と煙出しのために、三角形の妻が形成された所謂入母屋造りであつた。大凡7～8畳程の土間の中央に設けられた暖炉が調理と灯に使はれ、その囲りに干草をしき、寝るときはその上に毛皮をのべると云つた、いわば「ねどこ」程度の原始的な住居であ



(写真1) 堅穴復原家屋(登呂遺跡)

る。写真1は登呂遺跡の堅穴住居を復元したものである。

神武天皇の「八紘為宇」の一節に「巢に棲み穴に住む習俗常となれり」とあるのは、その頃この様な堅穴住居に人々が群れをなし「むら」を作つて住んでいたことを示すものであろう。その頃の服装は裸体の上に「も」と呼ばれた衣服を腰にまいた所謂「腰巻姿」で、その後さらに「袈裟衣姿」即ち丈の長い布を肩の反対側の脇下に巻く服装も用いられるようになった。この衣料は「たべ」と呼ばれ、主に毛皮でできたものであるが、楮（こうぞ）などの樹皮を叩きのぼしたのも広く使われるようになり、これは後に「妙（たえ）」と呼ばれた。また当時は昼の衣服のまま夜も寝ていたもので、寒い時には手持の「も」を何枚か上にかけて寝たものと思われる。一方大陸では、かなり以前から進歩した漢民族の文化が既に存在していたが、その伝来とともに我が国でも水田農耕が発達し、狩猟期から農耕期への大転換が次第に行われるにしたがって、自然に経済力の上昇と格差が生じ、必然的に階級制度ができたため、貴族、豪族は一般民衆に比べ相当豊かな生活をするようになった。弥生に次ぐ古墳時代の最大の遺物である高塚古墳を見ると、麻、苧、楮、藤などの植物繊維以外に絹織物も多く用いられていたことがわかる。またこの頃の地方豪族は一般の民衆と異り、床を張つた高床住居（写真2）に住み、床の上の敷物と寝具も種々のものが工夫され、又大陸から伝来したのも多く用いられたようである。日本書記によれば、応神天皇の頃（AD300年前後）百済と晋より多数の人々が渡来帰化したので、高度の染織技術が伝わるとともに、生活習慣の一部である就寝形式にも相当影響を与えたことが容易に想像できる。



写真2. 高床復原家屋（登呂遺跡）

### 3 中世の住居と寝衣具

中世に入って弥生時代に伝来した高床建築の規模、形態は益々発展し、用途別に棟を追加、拡大した宮殿形式の豪華な住居が多く見られるようになった。堅穴住居では、ほとんどの生活機能が一つの建屋内で満たされたのに対

し、高床建築では床が高く、防湿効果がよいため、衛生的で快適な生活を楽しめる反面、それぞれの機能に適した建屋を別々に建てる必要が生じた。特に「カマヤ」は炊事用に防火防煙効果のよい建築様式で建てられたわけである。また高床の建物をもつ程の豪族ともなれば、貴重品を収納する倉庫も必要であろうし、その権威を保持するための政（まつりごと）、儀式の場所にふさわしい豪華な設備、様式の建屋も必要となり、これらが総合的に発展して遂には宮殿、神社の発生となったことが充分想像できる。元来神道は一族部落の発展を祈念して豪族が邸内に祖先神を祭り、儀式の場所として利用したことから自然発生的にできた信仰であり、また祖先神は現存する人間と同様またわ同一の建物に住まうことであろうとの考えから、神社の本殿は住宅建築と同じ様式になっている。

また中世の寝衣具として随書倭国伝に記されている薦（しとね）は推古天皇時代に用いられた敷物で菅や藁で編まれたものか、または雑皮（猿、鹿、猪等の野生の獣皮）で作られていたことがわかる。このように「しとね」とは寝具としての敷物の意であるが、敷ふとんとして用いると「たたみ」上に掛けると「ふすま」と呼んだようである。

「たたみ」とは、現在の「たたみ」ではなく、物を重ねることの意であり、うすい敷物を重ねて用いたことから、この言葉ができたものと思われる。古事記にでてくる「こもだたみ」「たたみごも」は茅、藁で作られた「こも（菰）」のことで、重（え）の枕詞としても使われている。これらの敷物はいづれも編まれたものか、織られたものであるが、貧しい人々は藁をそのまま敷いて寝たことであろう。

「ふすま」（衾、被）とは辞苑によれば「昔ねるとき体をおおう夜具で四角に縫い袖も縁もないもの」とでている。古事記に「文垣のふはやがしたに「むしぶすま」柔やがしたに栲衾、さやぐが下に……」とあるが「むしぶすま」とあるのは蚕（むし）衾、すなわち絹の夜具のことで、おそらく「ムシ綿」（真綿）を入れた絹の掛布団のことであろう。また「栲衾」は栲布（かじの皮の繊維で織られたもの）で作られた衾で、麻布以前に使われている。同じく「文垣のふはやがしたに」の「文垣」は帷帳のことで、ふわふわした唐草模様の彩色美しい帷帳を寝室にあしらった貴族の住居の様が想像される。万葉集に見られる「麻衾」は栲衾の後にでてきたもので、絹ほどではないが広く用いられており、地方では苧麻布、栲布、藤布が多く用いられたと思われる。

#### 4 総 括

以上述べたとおり、縄文、弥生時代の住居が堅穴式の伏屋であった頃には寝衣具も同じように「腰巻姿」「袈裟衣姿」の単純なもので、夜はそのまま土間に干草、毛皮を敷いて寝ており、その後、古墳時代に漢文化の渡来、それともなう生活形態の変化、経済力の上昇と格差、階級制度の自然発生とともに建築、染織技術も急速に進歩し、住居、寝衣具もそれに応じて形式、実用性を兼ね備えた豪華なものに発展してきたものであるが、一方取り残された下層、貧民階級の人々は華やかな経済文化の発展から権威と富者への奉仕に甘んじて、何等生活様式の向上も見られず、依然として住居、寝衣具ともに古代初期に近い状態で、あったことも事実であり、今日の高度経済成長の蔭に共存する、スラム街の状態に似通った不調和と格差は古くから存続していたことがわかる。なを近世の寝衣具とくに「ネマキ」についての最近の傾向を別稿にて発表する。

#### 参 考 文 献

- |     |           |          |
|-----|-----------|----------|
| 1 ) | 万葉集 一卷    | 日本古典文学全集 |
| 2 ) | ” 二卷      | ”        |
| 3 ) | ” 三卷      | ”        |
| 4 ) | 枕草子       | ”        |
| 5 ) | 被服文化 №110 | 文化服装学院出版 |
| 6 ) | ” №118    | ”        |
| 7 ) | 日本の美術 №38 | 伊藤延男著    |
| 8 ) | 日本の住宅史    | 田辺泰男著    |